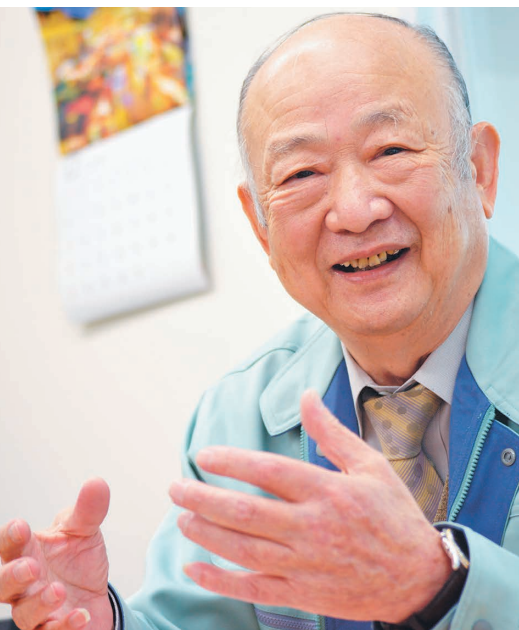


「プラスチックで芸術を創造する」

あくなき進化への挑戦

株式会社 アテックス



京都事業所 生産・研究開発センター
(京都府相楽郡精華町光台1-2-11)

株式会社 アテックス

代表取締役会長：浅野 典成 氏
 本社：大阪府東大阪市加納3-13-15
 創業：1993年（平成5年）
 社員数：260名
 事業内容：

- ・プラスチック製品の開発
 (企画・デザイン・設計)・販売
- ・各種熱可塑性樹脂(主にエンプラ)の
 射出成形品の製造販売

創業以来、プラスチックの開発を重ねてきた株式会社アテックス。独自の生産技術を武器に、近年では高機能樹脂と金属という異種材料を用いたインサート成形品が、車載用、産業用、民生用機器に幅広く活用されています。今回は京都事業所 生産・研究開発センターにて、創業当時の様子や製品の強みについて、代表取締役会長の浅野典成氏にお話を伺いました。

— 長年勤めた会社から独立、

自宅で操業を開始

バブルがはじけて間もない1993（平成5）年、不況のあおりを受け、私は26年勤めた樹脂成形の会社を退職し、独立することを決意しました。開発のトップとして業界の先端技術に携わっていたため、他社からのお誘いもいくつかいただいたのですが、年齢的に再就職は気乗りがしませんでした。

どうしようかと考えた末、自分で事業を始めることを決めました。当時はお金も人もありませんので、自宅で自分一人だけのスタートでした。もちろん工場もありませんので、いわゆるファブレスメーカーです。そこから株式会社に変更するまでの3年間、設計提案の開発営業を一人でこなしました。

その後、徐々に仕事の量が増え、パワー半導体分野の仕事も受注するようになりました。半導体といえば、それまでははんだ付けでの接合が一般的だったのですが、ワイヤーボンディングという、当時まだ新しかった技術を利用して、パワーモジュールのモーター用インバーターなどのパッケージの小型化に挑戦したところ、あるメーカーのラインナップに載り、商品化することができました。その後、現在得意とする高機能樹脂と金属の一体成形に取り組み始めました。

— 独自の生産技術で実現した

高機能樹脂と異種材料の一体成形

当社は創業以来、「省エネ」や「エコ」の分野に注目し、太陽光発電や風力発電、新幹線やLRT（次世代路面電車）などの製品へ幅広く部品を供給してきました。

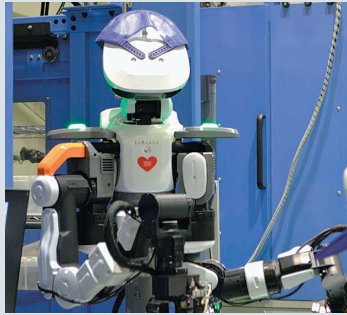
正直に言うと、当社の製品は形状だけでなく誰でも同じようなものが作れると思います。しかし、これらの製品の中には電気を通すバスバーや信号端子、300ミクロンのアルミ製ワイヤーなどが複雑に組み込まれています。たとえば500本あるワイヤーのうち1本でも切れてしまうと、その製品は使い物になりません。また、設計に小さなズレがあったり、少しでも空気が入ったりすると、絶縁不良を起こしてショートしてしまうのです。加えて、成形には圧力が掛かりますので、組み込まれるバスバーや信号端子が変形しないような技術も求められます。

この、高機能樹脂と異種材料を一体成形する生産技術は、他社には真似ができない当社独自の技術だと思っています。

— ものづくりに対する思い

当社は創業時から「プラスチックで芸術を創造する」ことをコンセプトに掲げてきました。もともとファブレスだったこともあり、何か他社とは違う

■京都事業所 生産・研究開発センター



人型協働ロボットが活躍する製造現場

狭いスペースでも人間と同じ空間で働けるように設計された協働ロボット。京都事業所では省人化に積極的に取り組んでいます。



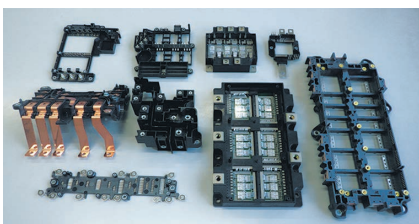
220t縦型電動射出成形機

業界最大級の設備で、大型化が進む自動車業界向けに活躍している。

付加価値が必要だと考えました。

では、付加価値とは一体何なのか。たとえば、世界的指揮者と日本国内で少し有名な指揮者とは、同じ曲を演奏してもコンサートチケットの値段は倍の差があります。その理由は、観客はただ演奏を聴きに來るのではなく、その演奏者ならではの味付けにお金を払っているからです。私はものづくりの世界でも同じことが言えると思います。お客様に求められたことをきちんと提供するというのは大前提ですが、それで満足してはただの下請けで終わってしまいます。そこに当社なりの付加価値を足すことで他社との差別化を図らなければ、この業界で生き残ることはできません。

そこで、我々はおお客様の開発段階から参画させていただき、長年培った技術ノウハウを用いて、製品開発のお役に立てるよう、独自技術の研究開発に取り組むことにしました。そうして関わらせていただいたのが、初代プリウスのインバーター部品の製造です。



トヨタ プリウスに搭載されている
車載PCUインサート成形部品
(下段右から2つ目)

当社は営業部門を持ちませんので、新規開拓なども行いません。お客様と一緒に考えて、作り、ひとつひとつ実績を積むことで信頼を得て、今日まで歩んできました。今後も、お客様に共鳴していただけるものづくりをしていきます。

— 積極的な新素材の研究開発

ものづくりの世界では、常に新しい技術が登場します。パワー半導体の分野においても、次世代の素材としてSiCすなわち炭化ケイ素に置き替わりつつあります。それに伴って、我々が作るパッケージも変化していかなければならないと考えています。炭化ケイ素は熱を持つ性質があるので、放熱はどのようにするか、高電圧をかけても問題なく使えるように設計できるかなど、新素材を製品に落とし込むには、解決すべき課題がたくさんあります。それら課題を突き詰め、ノウハウとして活かすための研究開発も積極的に行っています。

— 進んで文系人材を採用する理由

実はここ数年、設計部門にも文系人材を積極的に採用しているのですが、それにはいくつか理由があります。工学系の方は専門的な勉強をされてきていますので、もちろん知識は申し分なくお持ちです。しかしその分、「こうし

なければ」という理論ありきの考えに囚われがちのように思います。一方で文系の方は、工学や設計の知識はありませんが、その分発想が柔軟です。

私はよく「活学」という言葉を使います。学校で習う学問はあくまでも基礎。その世界に飛び込んで、体で吸収する知識の方が現場では活きますのです。実際、私がそうでした。何の知識もなく社会に出ましたが、色々な場所へ足を運び、見聞きしたことを自分のものにしてきました。また、誰かにお願いして教えてもらうというのはひとつのコミュニケーションです。コミュニケーションとサービスは商売に必要不可欠です。ただ物を作って売るだけではいけません。アフターサービスをして、どんどん情報収集をする。そうして学んだことを社員の皆さんにも「活かして」ほしいのです。

また、若い社員には「力をつけて、いつか独立しなさい」と言っています。「会社のために働くのではなく、自分のために働きなさい」と。仕事に夢を持ち、喜びを感じてもらいたいです。

物事にはタイミングがあります。私がこの会社を成長させるきっかけとなった車載部品を作ったように、皆さんも自分のタイミングを逃さず掴み取り、大きく成長してもらいたいです。

— 貴重なお話をいただき、
誠にありがとうございました